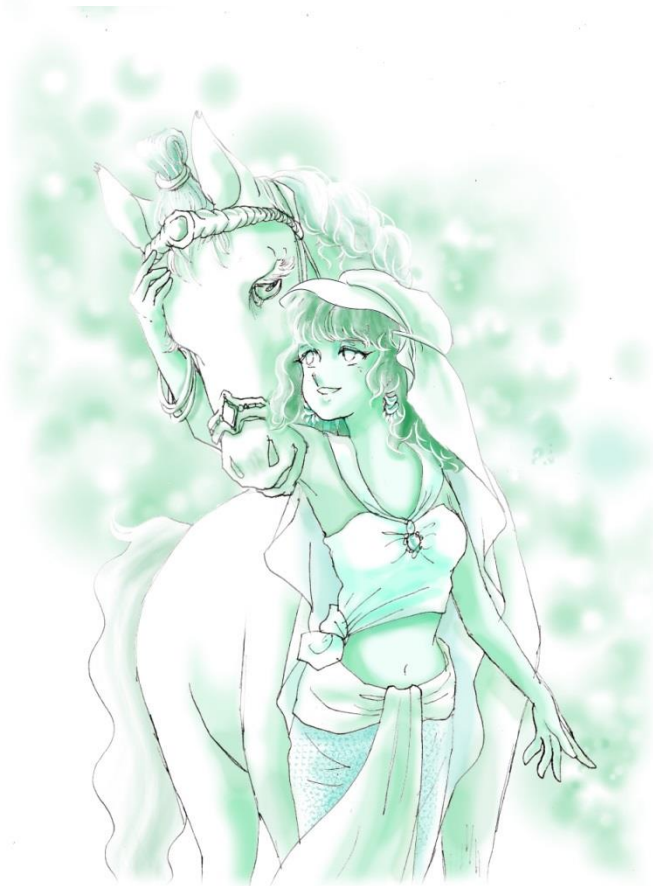


風の末裔シリーズ・6th シーズンの2

～リピッツアの朝～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>

朝霧に覆われる砂の原。

不思議な光景があった。馬の高さの空中を、ヒトがフワフワ浮かんでいるのだ。かなり近づけば、霧に溶け込む程の真っ白な馬に、ヒトが乗っているのだと分かる。

鞍上は、長いソバージュ髪にしモン色の瞳の女性。濃い飴色の肌が、乗馬の白さを際立たせていた。

この辺りにも葦毛馬はいるが、そんな半端な白さじゃない。東国の陶磁器を思わせる、一点の曇りもない純白に、ルビーみたいに真っ赤な瞳。遠い西洋の一地域だけで繁殖される、リピツツアという稀少馬だと聞いた。

大陸を渡る馬商人が、年に一度の大市に、目を惹く看板として連れていた、お伽斬ごきばなしから抜け出たような白馬。

彼女は一目見て、火が付いたように憧れた。焦がれて焦がれて毎日通い詰めて、飽きもせず眺めていたら、市の最終日、義兄あにが大量の駱駝を引き連れて現れた。

「まったく親父殿はカーリに甘いんだから。で、欲しいのはどの馬なんだ？」

あれ絶対ホツてるぜ……と、フツフツ言っ手ぶらの義兄の横で、彼女は夢のような気分で、憧れの白馬に寄り添った。

しかし乗馬してみても、この馬のあまりの白さに、自分がみす

ほらしく添くわわないのに、気が付いた。本当に自分がこの馬を手に入れてしまつて、よかつたのだろうか？ 何処かの綺麗なお姫様が乗る馬ではなかつたの？

勿論そんな事、義兄に言える訳はなく、手に入れてしまつてからの戸惑いは、ガツカリ感へと変わつて行つた。

我が物にした方がいいが、この馬はトラブル続きだった。砂漠の深い砂で肩を痛め、暑さで腹を痛めた。

義兄は、後先考えずにただ綺麗なモノを欲しがつた妹を責め、彼女は、自分の思慮の足りなさに、ほとほと嫌気が差して、落ち込んでいた。

「ホントト、カーリは白が好きだなあ」

そう言つて笑い飛ばしながら、逆光を背に既に入つて来たのは、馬に負けず劣らずの、真っ白なヒトだった。

「うん、カーリに似合う！ ピッタリだ！」  
「うそ……？」

「ホントだよ、カーリの馬になる為に生まれて来たんだ」  
真っ白な髪の渡りの彫刻家、フウヤに初めて出逢つたのは、自分がまだ何も知らない小娘の頃だった。

当のフウヤだつて子供の域を抜けたばかりの年下だったが、自分よりずっと大人びて、色んな事を知つていた。

毎年冬に砂漠を訪れる彼に特別な想いを抱き出したのは、リピッツアを手に入れたその年だった。

「この馬が一目でカーリの心に飛び込んだんだろ？ それはカーリの馬になるって、運命だったんだよ」

フウヤがそう言うと、本当にそんな気がして来る。

彼は馬の身体を診て、彼女がこの馬と共に過こすにはどうすればよいかを、一緒に考えてくれた。

カーリはフウヤに教えられた通り、毎朝、馬の下に潜り込んで、腹や脚を、熱心にさすった。それ以前は、こんな藁にまみれる仕事は、総領屋敷の厩うまや番任せだった。

馬の身体に触れていると、薄い皮膚の下の息づく流れや、ちよつとした変化も、見つける事が出来た。腹の下にいる方が、背にいる時より、馬の信頼が要る事も分かった。

そう感じ出した頃から、リピッツアは病気をしなくなった。フウヤの黒砂糖色の栃栗毛みたいに、主が来ると耳をくりくりさせながら寄って来るようにもなった。

不思議な感情が湧いた。モエギやハトウンにも感じた事のない感情。そうしてやっと、リピッツアが自分の馬になった気がした。

そんな風に、フウヤは自分の狭かった世界をどんどん広げてくれた。無知な娘だからと、甘やかして閉じ込めたりはしなかった。

フウヤと一緒にいて、自分の中に流れ込んで来るモノ…、それは『知る事』だ。知りたいという気持ち。

例えば、『命を賣つ』という事。何気なく着ている綿だって、多くのカイコを煮殺して出来る。

世の中にはそういう事、知りたくないと思う者もいるだろう。でも、自分は知りたいと思った。修道院の中しか知らずに育った自分にとって、知る事が生きる事だと思った。

早く冬になってフウヤが来ればいい…、気が付けば、いつもいつもそう思っていた。

今、こうして朝霧の中リピッツアのたてがみを撫でながら、彼女は、大市に通い詰めていた時、親しくなった馬商人から聞いた話を思い出していた。

「白ってのは、自然界で一番弱くて強い色なんだぞ」

「…弱くて強い？」

「そう、雪の季節は別として、それ以外は自然界では目立ち過ぎるだろう？ 白い仲間ばかりになったら、敵に襲われやすく

て全滅しちまう。だから、白ってのは群れから弾かれるんだ。それに遺伝しにくい。種が白を拒絶しているともいえるな」

「ふうん、白って可哀想」

「ところが、そうでもない。白の遺伝子は、とんでもなく逞(たくま)しいんだ。遺伝しにくい代わりに、ひとたび白の遺伝子が働きだしたら、他の色を食い潰(つぶ)しちまう。例えば茸(茸)毛は、本当は黒やグレーになる筈(はず)だったのが、白の遺伝子が他の色を塗り潰して、白に変えちまうんだ」

「へえ、何でだろ？ 白は種の為に良くない色なんだろう？」

「そう、そこなんだ。これはオジサンが思うだけなんだが、白ってのは、元々自然界になかったんじゃないか？ 後からわざわざ、バラ撒かれたんだ」

「誰が？ 何の為に？」

「それを言っちゃあ、『神サマ』って言うしかないが……。まあ、ほら、神サマって奴は、物事に良いも悪いも織り混ぜるだろ？ 馬に關しては、白いのが混ざっていて敵に襲われる危機が増えたらから、早く走れるように進化した、って訳だ」

「じゃあ、白って、神サマが色んな物事を良くする為に、特別に創って散りばめたのか？」

「ははは、なるほど、そうかもな。まあ、リピツァに關して言えば、西洋のとある島で、白い遺伝子を持った馬達を集めて

人工的に繁殖したんだ。王室の式典用とかの為に。ヒトが神サマの領域をやっちまうんだから、罰当たりだわなあ」

ミルクの滝みたいなたてがみを見つめながら、馬商人の理屈を、彼女は遠くに聞いていた。

—— 神サマが特別に授けた色なんだ ——

朝霧の向こうに色が見えた。

黒砂糖色の栃栗毛の馬だけが歩いて来る。近付けば、霧に溶け込む程の純白なヒトが乗っているんだと分かる。

「やあ、カーリ」

彼女の大好きな、真白い前髪の下の明るい瞳が微笑んだ。

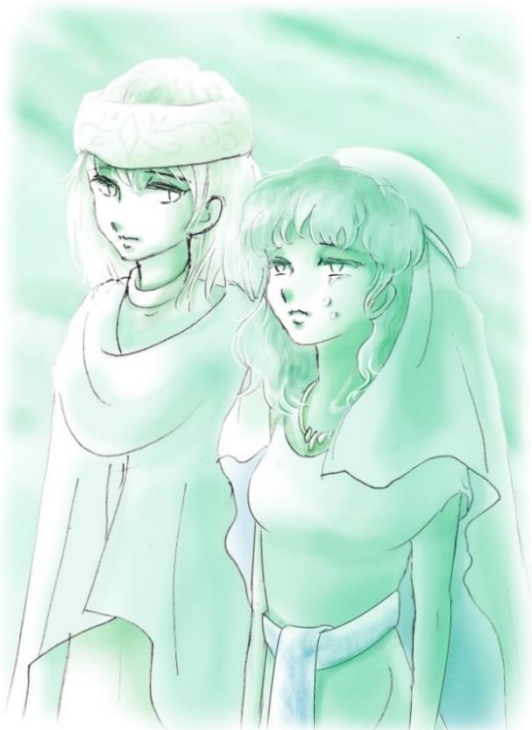
「行こうか」

\*\*\*

春の初めの三日目の夜、モエギがこの世の使命を終えて逝ってしまった時、カーリは生きる拠り所を失って、茫然となっていた。

ハタウンの世継ぎを産む事を使命と教えられて育った彼女は、ハタウンにそのつもりがない事を悟ると、彼の妻とその子供を支える役目に回った。

自分を放り出さないうで家族として大切にしてくれた総領殿に對する恩返しな気持ちもあっただけれど、命掛けて世継ぎをこの



世に送り出したモエギを見て、何かを感じた。彼女の側にいてみたいと思った。

共に暮らす内、モエギは彼女の知らぬ温もりを教えてくれた。多分、『お母さん』ってこんな感じなんだ…と思う事が、何度もあった。

西風の湖の対岸の葬列を、茫然と見送る彼女の傍らに、白い髪を西陽に染めた青年が、ずっと立っていた。

夕暮れて二人の影が藍色に沈む頃、彼はボツンと言った。

「おいで、僕と」

「うん…」

彼に出逢って『知りたい』気持ちを持たなかったら、モエギの看護をしたい…モエギを知りたい…とは思わなかっただろう。知りたい気持ちだが、自分の世界をどんどんと広げてくれた。だから、もっと彼の側にいたいと思った。自分の生まれて来た、この世をもっと『知る』為に。

朝霧の砂漠で馬を並べて揺られながら、彼女はそんな風に分の心を整理整頓していた。フウヤは黙って馬を進めている。

「あ…」

前方にまた影が現れた。

今度はヒトも馬もハッキリしている。黒衣の馬に濃い艶色の

肌の、漆黒のハトゥンだ。

「まったく、お前らはー」

「誰が反対する訳でなし、何で黙って行くの？」

ハトゥンは苦い顔をして、義妹(いもうと)が残して行った、

羊皮紙の手紙を「フアラ」振った。

「だって、慣わしがあるんだもの。砂の民の娘に求婚するには、

父親に殴られに行かなきゃならないんでしょ？ お義父様、せ

つたいフウヤを、目も当てられないべっぴんにする……」

カーリは罰悪そうに、上目で義兄を見た。

「正確には決闘だ。ホンットお前はモノを知らないな。まあそ

の飄録玉ひゅーろくたまが、親父殿とマトモにやり合えんて

は思えないから、結果的には同じだが」

ハトゥンは真っ黒な瞳を動かして、ギョロリと飄録玉を睨ん

だ。当の飄録玉は、どこ吹く風な表情で、二人のやり取りを聞

いている。

「義兄(あに)さま、わらわはフウヤと行きたい。行ってもいい

でしょ？」

「俺がお前のやりたい事を妨げた時があったか？ ただ、こい

つに文句がある。俺様の可愛い可愛いイモウトをさらって行く

んだ。それなりの覚悟があるんだらどうなの？」このフーテン野郎

「義兄さま、フーテンじゃない、フウヤだ」

「お前は黙ってろ」

「僕と決闘するって言うの？」

フウヤは冷静に言った。

「話が早いじゃないか。親父殿が黙殺していても、義兄として

俺が、素通りはさせん」

「見るからに実力に差があるってのに、鼠をいたぶる猫のつも

り。」

「うるさいな、じゃあお前は徳物を持って。剣でも粘土バハラでも」

ハトゥンは先に下馬してせっかちに構えた。

フウヤはゆっくり馬から降り、そして泣く子も黙る漆黒のハ

トゥンに対して、驚きの台詞を発した。

「後悔するよ……」

言うが早いか、懐に隠し持っていた拳太の丸い袋を、ハトゥ

ンに向かって投げ付けた。

「!!??」

咄嗟に手で払おうとしたハトゥンの前でそれは破裂し、温

った砂が飛び散った。ただの砂じゃあない。強烈な臭い。

「くあああ——!!!!」

「ずらかれ!!!!」

フウヤは馬に飛び乗る、リピツアの尻を叩いてカーリと共に駆け出した。

「あ、待ちやがれ！ うう、ぐふふ」

追い掛けたいハトウンは、強烈な目の痛みにうずくまるしかなかった。手探りで馬にたどり着いて、鞍の水筒で目を洗い、やっと生き返った時には、霧の中に影ひとつなかった。

「あんのよろおお〜!!」

「フウヤ、フウヤ、あれは何？ 義兄サマのあんな悲鳴、初めて聞いた」

相当な距離まで逃げて、フウヤは駆けるのをやめた。

「ああ、あれ、砂漠イタチのおしっこを混ぜた砂。それを羊の腸にパンパンに詰めといた」

「イタチの・おしっ……」

「目に来るぜえ、あと、臭いも一週間は取れない。ま、道具を使っただけでいいって言ったのは、向こうだ」

フウヤは罪のない顔で、愉しそうに笑った。

目を真っ赤にした息子の前で、総領殿も、腹を抱えて大笑いしていた。

「親父殿、笑いゴトじゃない。あのフーテン野郎、絶対許さん」

「いやいやいや……お前にペソをかかせた男なんぞ、初めてじゃないか？ 我が娘の相手としては申し分ない」

「隙を突かれたんだ」

「隙を見せたお前が悪い」

「……………」

総領は大きな身体を揺すって、窓から霧の砂原を見た。

——成る程な……

白い青年は、フーテン野郎でもない。タベ遅くに、ちゃんと挨拶に来た。

「カーリは野蛮な習慣だと言っていただけで、僕はそうでもないと思う。モエギを見ていたら、親がどんだけのモノを子供に分かち与えるか分かったから。だから、その子供を委ねる、儀式みたいなモノなんでしょ？」

そう言って上衣をはだけて、生っ白い腹をさらした。

「カーリに内緒にしておきたいから、顔はやめてくれる？」

「喰えんガキかわい」

総領はそう言って指をポキポキ鳴らし、細いみぞおちに遠慮のない拳をぶち込んだ。白い青年は羽根枕みたいに宙に浮き、床に落ちて暫く地獄の悶絶をしていた。

「吐くなよ、床が汚れる」

「うう…ふあい…」

「三峰という土地は寒いのだらう。」

「うう…今頃は…まだ雪が残っていて…うへう…」

「あの娘に風邪を曳かせたら、もう一度今のお見舞いするぞ。」

「…し…承知…」

ハトウンにも内緒にと言つて、青年は腹を押さえながら立ち去った。照れ臭いからというのは嘘だらう。本当はこれを狙っていたのだな。

まあ、連れ合いを失つて死んだように沈んでいた我が息子が、大声を出して地回太(じだんた)を踏むのも久し振りで、この屋敷に活気が戻つたような気がしなくてもない。

「まったく喰えんカキだわい…」

霧の流れる地平を見やつた総領の頬には、また笑みが込み上げていた。

「…幾ら何でも、酷過ぎやしないか？」

フウヤと馬を並べて歩きながら、カーリは義兄をちょっと気毒に思った。

「ふん、ハトウンにはそれだけの目に遭う理由がある。」

「何、それ？ 義兄サマ、フウヤに何かしたのか？」

「カーリの婚約者(いいなま)けだつたら。」

「あれは…」

「カーリの生まれてからの十何年か、カーリの人生はあいつのモノだった。それだけで、僕にとっては大罪人なの。」

「そんな一方的な…。義兄サマは何も知らなかったのに。」

彼女は心底呆れた顔でフウヤを見た。

「これ即ち、ヤキモチという。」

「はあ？」

「これで気が済んだ。ああ、さっぱりしたあ！」

白い青年は、また白い歯を見せて笑つた。

霧は流れて去り、空に真っ白な筋雲が、これから向かう地平に向けて伸びていた。

あれも神サマの描いた色なのかもしれない。

くおしまい